

ボランティア活動体験作文金賞作文紹介

小中高生を対象に「ボランティア活動体験作文」を募集したところ、49点の応募がありました。9月13日に作文審査会を開き、選考の結果、小学生の部、中高生の部、それぞれで金賞に選ばれた作品を紹介いたします。

小学生の部

金賞 中島 美佳(上市中央小5年)
銀賞 種田 千華(陽南小学校5年)
" 千葉 令奈(上市中央小6年)
銅賞 廣島 祐希(上市中央小5年)
" 堀 凧沙(上市中央小6年)
" 藤田 心紬(白萩西部小学校6年)

中・高生の部

金賞 高井 里紗(上市中学校3年)
銀賞 轡田 壽乃(上市中学校3年)
" 清水 奏愛(上市中学校3年)
銅賞 清水 杏理(上市中学校3年)
" 戸田 遥(上市高等学校3年)

小学生の部 金賞

はじめてのボランティア

上市中央小学校五年 中島 美佳

八月六日に社会福祉協議会の親子バス教室に参加しました。訪問した老人ホームは、常楽園で、六十才から百三才までの八十名のお年寄りが自分の家と同じように暮らしています。生活の中では、カラオケやお菓子作り等をしながら、有意義な時間を過ごしています。

短い期間宿泊できるショートステイを利用して、生きている方が二十名いて、また、朝に来て夕方まで過ごすこともできます。デイサービス利用者は、友達と話し等をして楽しい時間を過ごし、「居場所」「なごみの場」として、生きる支えや生きる力の源となっています。

職員の仕事内容について話を聞いてみると利用者一人一人の身体に合わせたお手伝いをして、いることやお風呂専用の車イスがあることにおどろかされました。

また、交代で夜も働いており、夜の仕事はとても体にきついと話されて、私自身も同感できました。ねむれない方には、話をし、一緒にトイレに行くこともよくあるそうです。

車イス体験もしました。車いすを押している時は、気づかなかつたことが乗ってみると、押す人が乗っている人の気持ちを考えずに進めたり、曲がったりと相手が怖がりです。車いすを進める時は、必ず「進みます。」と声をかけなければいけないことがわかりました。

そして、車いす体験後車いす清掃は初めてだったため、どうすればよいか分からず、きん張しながら進め、食べ物のカスやかみの毛が残っていたので、びっくりしました。職員の方は、車いす清掃は、時間がなかなかとれないので、「助かりました。」と喜んでくれたので、うれしくなりました。

最後にデイサービスの利用されているお年寄りと交流しました。私がお話したおばあさんは、私が顔を見せると、うれしそうにニコニコしながら質問してくれました。

「何才なの。何年生？お母さんの言うことは、聞くんだよ。」

楽しく会話しながらパズルや折り紙をしました。おばあちゃん、本当にうれしそうにしていました。

園の人が言っていました。

「子どもが遊びに来てくれるだけで、お年寄りが笑顔になるんですよ。」

と、言っておられました。それを聞いて私たちは、むずかしいことは、できないけれど、ただ、一緒にいるだけで、お年寄りに、元気をあげることができるとなると思いました。

最後に、職員の言葉が心に残りました。

「介護すると言うことは、お年寄りと一緒に喜び、励まし合い、悲しんであげる」ことであると話され、共に生きる、共感することを教えてもらいました。

ボランティア活動する機会があれば、今回の体験をいかし、言葉を忘れずに行いたいです。

中・高生の部 金賞

変えてもらった気持ち

上市中学校三年 高井 里紗

私は七月二十五、六日のボランティアスクールに参加するまで「障害者」と言われる人を心のどこかでは差別していました。目が白目を向いているから気持ち悪い、手が汚れているから触らないでほしい、何か一人で話しているからかわりたくない。自分と同じ人間なのに相手は障害者というだけで普通に話したりする事ができませんでした。

そんな私の考えを変えたのが二日間のボランティアスクールでした。私は最初、「友達と話したりしているのが楽しそうだから。」という理由で参加を申し込みました。当時はまだ、障害者とふれ合ったりする気は全く無かったのです。そして一日目。開会式が終わって決めた班に分かれ、後から班に入ってきた障害者の方達の自己紹介があり、脳に障害がある人が多かったため「二番めんどくさい班になってしまった」と気落ちしていました。

私は班長だった為、仕事がたくさんあり疲れていた時、ある一人の方が「ばがれ」と私に言ったのです。その人は脳に障害がある方で何を言っているのか分からず無視をしていましたが、何度も言われるうちに「がんばれ」と私を応援してくれている事が分かったのです。「ありがたい。がんばるね。」その言葉がボランティアで交わした初めての会話でした。

二日目は一、七キロのウォーキングをし、バレーキューをしていました。道中に十間の四択クイズがあり、答えながら歩いている時、暑いから歩きたくない駄々をこねる人に対し、「大人なんだしこれくらい我慢してよ。」と思いつながらなだめようとしませんが全く言葉が通じません。怒って、置いて行こうかと思つてた時、「暑いねー。でもゴールしたらね、とっても涼くなるよ。」ヘルパーの方の優しい声にその人は立ち上がり歩き出しました。それを見て私はふと思いました。障がい者の方は人の心の中が見えるのではないのかと。



自分が周りと違うことによって、周りの人が気付けない、人の心の中が分かるのかもしれないと思いました。そして今まで私が相手にしてきた方達の気持ちを考えると自分はずいぶん酷いことをしてきたと反省させられました。表面上だけでなく人の心とも向き合っている方達は立派だと思われたのもこの時でした。それから、考え方を変えて、「どうすれば気持ちを伝えられるか。」を意識して班員全員と会話ができるようになりました。活動が終わり、帰る時も手を振ってくれた事は今でもうれしい気持ちにさせてくれます。

今回の活動で私は障害者の方達にたくさんのお話を教わりました。相手の事を考える、人を差別してはいけない。どちらもこれから生きていく上で大切な事です。そして今回学んだ事をたくさんの人に伝えて前の私の様な考えが減るようになりたいです。周りから見れば綺麗事かもしれませんが、相手の事を思いやる人が増えれば幸せな国ができると思います。